様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年　6 月 11 日現在

機関番号：２３９０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５３０７４３
研究課題名（和文）　福岡県における戦後のモデル保育所に関する実証的研究

研究課題名（英文）
A Study on the Model Nurseries in Fukuoka Prefecture after World War Ⅱ

研究代表者
清原　みさ子（KIYOHARA　MISAKO）
愛知県立大学・教育福祉学部・教授
研究者番号：００００９０３６６

研究成果の概要（和文）：昭和 26 年に指定された 11 のモデル保育所のうち、多くの関連資料の収集と聞き取り調査ができた 3 施設を中心にしながら、指定の主旨に応ずるのみでなく、それぞれの保育理念や地域性を踏まえつつ、積極的に新しい保育の創造に向けて努力していたことを究明した。また、状況を把握できた施設の半数以上で、小学校教師経験者等が保育を進める上で中心的役割を担っていて、単に預かるだけでなく教育的側面の工夫も重視していたこと、財政的支援としては共同募金からの配分が大きかったことも判明した。

研究成果の概要（英文）：Many materials are kept in the 3 of 11 model nurseries. We gathered these materials and heard the experiences of nursery school teachers. We make clear that each model nursery endeavored to create the new early childhood education and care according to its own principles and the needs of area. At over half of the model nurseries, the schoolteacher acted the part of leader. The distribution of Kyodo-Bokin supported the model nurseries.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	700,000	210,000	910,000
２００９年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：幼児教育・保育　保育史

１．研究開始当初の背景

（1）福岡県で、戦前から農繁期託児所を開設していた御幸保育園（現うきは市）に残されていた多数の資料を入手でき、その分析を進める過程で、戦後の福岡県のモデル保育所の一つであったことがわかり、福岡県のモデル保育所の研究に着手することとした。

（2）福岡県は、戦前から企業の託児所や農繁期託児所が普及していた県の一つであり、戦後、いち早く保育所の普及に取り組んでいたと思われるのに、その実態は明らかにされていない。グループで戦後の名古屋市の保育研究に取り組んできたので、地方の保育史研究を進め、比較研究していくことも重要であると考えた。

２．研究の目的

（1）昭和 20 年代は、戦後の新しい制度のも

とで、新しい日本の未来を担う子どもたちのために、幼児教育・保育を作る取り組みがなされ、保育内容・方法の研究が熱心に行われていた。そうした取り組みの一つに、福岡県のモデル保育所事業も位置づけられるが、この研究はなされていない。そこで、この事業が行われた背景、モデル保育所の状況、公開保育・研究会の状況等を明らかにし、モデル保育所が果たした役割を考察することにより、保育史研究の進展に寄与することを目的とする。

特に、実情を丹念に明らかにする地方史研究が少ない中で、こうした研究の積み重ねは、重要であると考える。

３．研究の方法

（1）モデル保育所への聞き取り調査および資料収集

（2）昭和 26 年のモデル保育所指定前後に、保母をしていた人たち及び当時保育所に通っていた人たちへの聞き取り調査

（3）図書館の郷土資料コーナーをはじめ、共同募金会での資料収集及び当時の新聞各紙の記事検索

４．研究成果

研究を通して明らかになったことを 5 点にまとめた上で、モデル保育所の果たした役割を究明した。

（1）モデル保育所の指定

昭和 26 年 6 月 4 日付で、福岡県民生部から 11 ヵ所のモデル保育所が指定された。その当時の県内の保育所の状況について、県議会で「県下三百の保育所中大多数の保育所が、最低基準にすら達していないのが実情」で、「最低基準を我々が論ずる場合、ただ単に設備の面のみではなく、保育内容自体についても、考えなくてはならない」が、県は「いかなる指導または措置を講ずる用意あるや」という質問がなされている。これに対して、県知事は「十ヶ所のモデル保育所を全県下に作って」対処するという答弁をしている。

県民生部から出された通知書によると、「その設備並びに運営については児童福祉施設最低基準に従うことは勿論より以上に向上させるよう努力せられたい」というのが、主旨であった。モデル保育所における生活訓練用具購入費として、県共同募金委員会から、特別交付金が配分されることが、通知されている。

これに関して、朝日新聞（西部版）で、「県は、保育所の質的向上と保育指導の徹底を期すため、県下 11 ヵ所にモデル保育所を選定」と報道されている。

このモデル保育所の指定は、保育の質の向上に関心が寄せられるようになった当時の社会状況が、その背景にあったことがわかる。

（2）モデル保育所の概況

モデル保育所は、関係市郡別に指定され、公立が 3 施設、協会立と委員会立が 1 施設ずつで、6 施設は私立であった。私立はすべて仏教系であり、そのうちの 4 施設は戦前から農繁期託児所等の保育事業を行っていた。また、2 施設は昭和 25 年に財団法人となっている。

こうしたことから、一定の蓄積もあり、基盤もしっかりしたところが、モデル保育所として指定されたといえよう。

（3）共同募金からの配分

福岡県では、共同募金からの保育所への配分が多かった。配分総額に占める保育所への配分額の割合は、昭和 22 年度から昭和 40 年度までの 19 年間通算で、約 18%である。昭和 23 年度から 27 年度までの 5 年間は、23.4%から 29.8%で、その平均は 26%になる。

昭和 23～25 年度分として多額の配分を受け、園舎の新築・増改築を行い、それが昭和 26 年のモデル保育所の指定につながったと思われる施設もある。

共同募金からの配分が多かったこともあって、共同募金への感謝の集いが開かれたり、共同募金への積極的な協力がなされたりしていた。

（4）モデル保育所指定の目的と各モデル保育所の努力

モデル保育所の指定についての通知書に、「昭和二十六年度本県モデル保育所として貴所（園）を指定したからその設備並びに運営については児童福祉施設最低基準に従うことは勿論より以上に向上させるよう努力せられたい」と記されている。昭和 26 年 6 月 20 日の「モデル保育所打合会」の資料と思われる「モデル保育所協議事項」をみると、「一、設置並に指定経過について」「二、保育所の運営について」「三、研究会開催について」「四、その他」が取りあげられ、「保育所の運営についてでは、「保育所の意義」「保育所の対象」「保育所の任務」「保育の内容」「職員」「保育所の設備」「保育所運営に関する問題」「保育所の地域活動」という 8 点があげられている。

これに先立ち、県の児童課への提出を求められた「別紙調査書」では、「一、措置人員」「二、経営者について」「三、保母について」「四、保育所の働きについて」「五、その他」に分けて、状況を記入するようになっている。

児童福祉施設最低基準に対して、各モデル保育所はどうであったかというと、まず保育室の広さは、把握できた保育所では、定員からみても十分でなかった。しかも、入所希望

が多く、定員以上が在籍している施設が多かった。こうした中で、新築、増改築を行って、施設の充実を図る努力をしていた。屋外遊戯場は、その広さが把握できた保育所は、どこも基準を満たしていた。

設備に関しては、児童福祉施設最低基準では、屋外遊戯場に、砂場、滑り台、ぶらんこを設けることになっていたが、これ以外に様々なものが設置されていた。保育所により設置されていたものは異なるが、鉄棒、遊動円木、シーソー、吊り輪、太鼓橋、小山、プール、子供の家等があげられ、それぞれの保育所が子どもたちの保育を考えて、まさに「最低基準に従うことは勿論より以上に向上させるよう努力」していたといえる。

室内の備品や保育用具に関しても、各保育所であげられていた用具は異なるが、児童福祉施設最低基準を満たすだけでなく、オルガンや蓄音機、幻灯機、紙芝居、童話、人形劇の人形や舞台等があり、保育を充実させるべく用具を備える努力をしていたことがうかがえる。

保母の確保に関しては、昭和 20 年代は全国的に必要な保母数の確保、有資格者の確保が難しい状況であったが、モデル保育所も例外ではなかった。保母数が把握できた保育所では、年度によっては若干足りなかった施設もあったが、ほぼ必要人数が確保されていた。実際の在籍児童数が定員を上回っている施設では、それに合わせた保母数を確保する努力をしていた。ただ有資格者の確保は、難しかった。各モデル保育所では、無資格で勤めた人には、2〜3 年したら講習と試験を受けるように勧めていたと思われることが、資料や聞き取り調査から判明した。

運営に関して把握できた保育所では、母の会・保護者会が行われていた。保育所によっては、班長会や給食運営委員会、教育講演会や料理講習会も行われていた。モデル保育所の「保育所の働き」の課題の一つであった「保護者の指導」という点からみると、積極的に保護者を保育所の運営に参加させ、保育所の見学や講演会等を通して保護者への働きかけをしていたといえよう。

(5) 研究発表会当日の状況

研究発表会は、第 1 回をあさひ保育園が昭和 26 年 7 月 20 日に行い、8 月に光應寺保育園が開催している。当日は、午前中に公開保育、午後から研究会を行っている。当日の様子がわかるのは、4 施設のみである。

木屋瀬保育園では、10 月 26 日に「健康保育」をテーマに、研究発表会を行っている。朝の歌の後、園外保育で天神様（第二運動場）へ行き、天神様にお参りした後、自由遊びで虫や花等の観察、ごっこ遊び、砂遊び等をして帰園、裸足で往復し、手足を洗って休息、終礼を行い 11 時 40 分に退園している。午後の研究会では、開会のあいさつを園長が行い、「信条、日常保育、運営について」説明をした後、「保育計画と指導」「規律整頓について」「給食について」の発表が保母によってなされた。

上広川幼児園では、昭和 27 年 2 月 16 日に「お店屋さんごっこ、お客さまごっこ」を行っている。当日の「保育の展開」をみると、登園してきて自由遊びの後、朝の集まりをして、10 時から出席捺印、間食、休息をしてから「お店やさん　お客さんごっこの話し合い」で、お店やさんを見学観察した発表や売る人買う人を決め、あいさつの稽古をするようになっている。その後、「お店の準備」「お客を迎えるお座敷」の準備をし、11 時頃からごっこ遊びをしている。保育は午前中のみで、臨時バスで降園している。

友枝保育所では、昭和 27 年 5 月に公開保育を行っている。当時保母をしていた人によると、保育室では大勢の見学者が入りきれないので、すぐ近くの公園にオルガンを運んでいき、そこで遊戯をしたという。元保母によれば、やったのは年長組で、その内容は覚えていないが、見学者から拍手喝さいを受けたという。

御幸保育園では、昭和 27 年 6 月 30 日に研究会が開催されている。当日の資料には、「本日の保育内容」として、「幼少」の「きく組」は「粘土　おだんご作り」、「年少」の「ばら組」は「ごっこ遊び。初歩のままごと」、「年長」の「うめ組」は「しゃぼん玉」、「ゆり組」は「麦わら遊び」、「もも組」は「共同製作。池の鯉」となっている。当日は「郡内からは朝早くから」見学に来ていたし、多くの参加者に驚いたのか「朝より皆とてもおとなしかった」という記述が日誌に残されている。

木屋瀬保育園は、鞍手郡の研究会で健康保育についての研究発表を 6 月に行っていて、郡をあげての研究テーマであったと思われるが、それぞれの保育所では研究発表会のために何か特別なことをするというのではなく、日々の保育の一端を発表していた。研究発表会には、どこも大勢の保育関係者がきていたようで、御幸保育園に残されていた参加者名簿には、130 名あまりの記名があった。

(6) モデル保育所の果たした役割

モデル保育所から、他のモデル保育所の研究発表会への参加も積極的になされていた。それは、御幸保育園の日誌や木屋瀬保育園の月報等からも、裏付けることができた。

当日の資料として配布された、上広川幼児園の「保育研究発表会要録」は、ガリ版刷りではあるが 45 頁にわたって、村の概況、園の概要、家庭状況をはじめ、「運営計画表」、「一日の標準時間表」、「2 月の総合カリキュ

ラム」、当日の「保育の展開」等がまとめられたものである。こうした配布資料は、各保育所が、年間の予定を立て、月の指導計画を作成し、計画的に保育に取り組むことが保育の質の向上につながり、必要であることを理解し、それをどのように進めるのか考え実践する上で、参考になったと思われる。

指導計画は、その種類や年度は異なるが、木屋瀬保育園、御幸保育園にも残されていて、これらの保育所が、モデル保育所指定の要請に対して受け身的に努力したのではなく、保育を充実させるために努力していたことを示している。定員を超える幼児たちが集まり大変な中で、ただ単に幼児たちを預かるだけでなく、地域の保育・幼児教育施設としての役割を意識して、日々の保育を工夫している様子は、同様な問題に直面している他の保育所関係者には、参考になったといえよう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 清原みさ子、豊田和子、原友美、赤堀直子、福岡県における戦後モデル保育所に関する研究―上広川幼児園の事例から―、愛知県立大学児童教育学科論集、査読なし、第 45 号、2011、pp.1-13

② 清原みさ子、豊田和子、原友美、赤堀直子、福岡県における戦後モデル保育所に関する研究―木屋瀬保育園の事例から―、愛知県立大学児童教育学科論集、査読なし、第 44 号、2010、pp.11-28

〔学会発表〕（計２件、予定１件）

① 豊田和子、原友美、赤堀直子、清原みさ子、福岡県における戦後のモデル保育所に関する実証的研究―その 3―、日本教育学会第 70 回大会、2011 年 8 月、千葉大学（予定）

② 清原みさ子、赤堀直子、豊田和子、原友美、福岡県における戦後のモデル保育所に関する実証的研究―その 2―、日本教育学会第 69 回大会、2010 年 8 月 22 日、広島大学

③ 清原みさ子、赤堀直子、豊田和子、原友美、福岡県における戦後のモデル保育所に関する実証的研究―その 1―、日本教育学会第 68 回大会、2009 年 8 月 29 日、東京大学

６．研究組織

(1)研究代表者
清原　みさ子（KIYOHARA　MISAKO）
愛知県立大学・教育福祉学部・教授
研究者番号：００００９０３６６

(2)研究分担者
豊田　和子（TOYODA　KAZUKO）
桜花学園大学・保育学部・教授
研究者番号：８００８７９１５
原　友美（HARA　TOMOMI）
愛知県立大学・教育福祉学部・非常勤講師
研究者番号：８０４４８７０３